

大塚久雄の生涯と学問

大塚久雄の経済史研究の特徴

大塚久雄（1970～1996）は、戦後の日本を代表する経済史家・社会学者である。

大塚の主要課題は、西欧における資本主義の発生過程とその精神的基盤の解明にあった。しかし、その主眼は、当時の日本社会の性格を世界史的視野で位置づけることに置かれていた。

こうした特徴をもつ大塚の学問は、比較経済視点、または大塚史学とも呼ばれた。

比較史の方法を大塚は、フランスの歴史家マルク・ブロックや、山田盛太郎「日本資本主義分析」（岩波書店 1934年）の「序文」から学んだ。

大塚の学問の最大の特徴は、マックス・ウェーバーの宗教社会学の影響を強く受け、歴史を動かす主体の精神的要因（エートス）に着眼した点である。

これにより、経済史研究の土台とも言うべきマルクスの唯物史観を相対化するとともに、マルクスを批判的に摂取、ウェーバーとマルクスという一見相反する学説の総合化を試みた。大塚の学問は、狭義の経済史に止まらず、政治、法律、文化、宗教なども視野に入れ、広い射程を有していたことか、日本の人文社会科学に大きな影響を与えた。

大塚の学問の骨格は戦前・戦時期に形成された。

ウェーバー研究は、戦時期にはフリードリッヒ・リストに学んだ生産力論を基礎に、それを支える経済倫理との関係を問題とし、戦後には人間類型論や共同体論などに活かされた。ウェーバーとマルクスという視覚はのちに「社会科学の方法 ウェーバーとマルクス」（1966年）、「社会科学における人間」（1977年）に結実し、市民層にも広く読まれて続けている。大塚の比較経済史研究の理論的枠組みとなったのが、資本主義の小生産者的発展である。これは、資本主義は、地主や大商人などの富豪から生まれたのではなく、封建制を打ち破って上昇してくる独立自営農民（ヨウマン）や農村の手工業者、都市の小親方、即ち小ブルジョア層によって生まれたとする異説である。

大塚は当時の学会における通説であったドイツ歴史学派による商業資本から産業資本への転仮説を批判し、封建制を解体する小生産者の歴史的意義に注目することで、それを土台とした中産的生産者層の成立と、その両極分解こそが、資本主義成立の基本線であると主張した。

この小生産者的発展説を形成する上で基礎となったのが、「前期的資本」という概念であった。

これは資本主義成立期以前の古い資本、すなわち産業資本に対する商業資本や高利貸資本のことで、マルクスの「資本論」第三巻における「資本の大洪水以前の諸形態」という指摘に注目し、大塚が独自に構想した概念である。

この概念はやがて、「近代資本主義」と、人類の歴史とともに古い営利欲による「賤民資本主義」との範疇的に区別するウェーバーの見方と重ね合わされ、資本主義発生史研究として

深められていった。

大塚が小生産者的発展説を構想した背景には、ドイツにおけるナチスの政権獲得という同時代への問題関心があったことも指摘したい。

当時のドイツでは、社会民主党が農民の利害を軽視したことで、この層の支持を集めたナチスの台頭を許してしまったと大塚は認識し、小ブルジョワ層の歴史的意義を考えるに至った。

大塚のほとんどの業績は「大塚久雄著作集」全13巻（岩波書店、1969～70年、1980年）に収録されている。

第十巻までは東大退官直後に刊行され、それ以降の三巻は主に国際基督教大学（ICU）の著作を収録したもので、比較経済史やウェーバーに関して理解を深めていく大塚の新たな展開として追加された。

学問と信仰への道

大塚久雄は1907年5月3日 京都市に生まれた 両親はプロテスタントであった。

伝統文化が色濃く残り 新党や仏教が混在する事におけるクリスチャンという家庭環境が大塚に与えた影響は 無視できない に影響を受けた。

京都府立第一中学校をへて第三高等学校に進んだ大塚は 三木清から哲学概念を学び その著者「パスカルにおける人間の研究」 に影響を受けた。

宗教哲学者の波多野精一とは夫と大塚の母が学友であった縁で、 中学時代から個人指導を受けていた。

京都での生活経験や勉学 両親から受けた影響は後年ウェーバーの宗教社会学を受容する一つの遠因となったとはいえないか。

1927年4月 大塚は東京帝国大学経済学部に進んだ

元来は京大の東洋史を志望していたが、東大への進学は、京都生まれの京都育ちはどうしても視野が狭いから、いっぺんは東京へ行った方がいいんじゃないか、という三校時代の教官山谷省吾（やまやせいご）の勧めにも影響された。

東大では日本経済史を志望したが、土屋喬雄が留学中だったため、西洋経済史の本位田祥男の演習を選んだ。

西洋経済史は偶然の連続もあって生涯の研究テーマとなったのである

大学生時代に内村鑑三の日曜聖書講義に参加を許された大塚は、その信仰50年記念集会で内村により直接洗礼を受けた

後に内村からは 信仰と社会科学（マルクス主義）はどちらも真理であるなら両者は究極的に一致すると教えられたことを、大塚は回想している

大塚は矢内原忠雄が指導する帝大聖書研究会にも参加し、旧約聖書「ヨブ記」における苦難の神義論に感銘を受けた

のちに大塚自身もバス降車時の怪我の傷が悪化し、戦時中に左脚を手術で切断したり、さら

に戦後は胸部の手術を三度も受け、片肺を切除したりするなど、その人生は苦難の連続となった

この病苦を支えたのは大塚の学問と人格の根底にある無教会基督者としての揺るぎない信仰であった

家庭の事情から大塚は実業界への就職を決めていたが、本位田の勧めで 1930 年 3 月に東大を卒業後、3 年間商業史の助手として大学に残り、株式会社の発生史研究に取り組む日本資本主義論争に影響を受けたり、ドイツ人講師クルト・ジンガーからウェーバーの宗教社会学を学んだのもこの助手時代であった

法政大学時代

助手の任期を終え いくつかの大学で非常勤講師を務めたのち、

1935 年 4 月から大塚は、法政大学経済学部助教授の職を得た

これ以後、4 年間の法政大学時代は、前期的資本概念を構想するなど、大塚の学問形成にとって極めて重要な時期となった

元来、大塚は、ドイツ経済史に関心があったが、イギリス経済史を本格的に研究するようになったのは、法政における講義の必要性という、これも偶然からであった

1937 年、本位田によって比較土地制度史研究室が東大に設置された

ここで大塚がイギリス、松田智雄がドイツ、高橋幸八郎がフランスをそれぞれ分担して研究することで、戦後にも続くことになる比較経済史研究のトリオが結成された

1938 年には助手時代からの研究を単著にまとめ、「株式会社発生史論」(有斐閣)として完成させた

同書は**企業形態としての株式会社の発生**を、

- ① 企業の結合と支配の理論と
- ② 前期的資本の理論の二つから改名したもので、英仏独語に加え、オランダ語文献も駆使している。オランダは大塚の経済史の発想の原点だった

同書の後編では、株主総会を欠くオランダ東インド会社と比較した民主型株式会社としてのイギリス東インド会社の成立過程を追っている

英蘭の比較史的視点は、同書によって確立され、これ以降、大塚の比較経済史研究の重要なテーマとなった

「発生史論」が刊行された年に、大塚は論文「農村の織元と都市の織元、16、7 世紀のイギリス毛織物工業における織元の二の型」や二冊目の単書「欧州経済史序説」を表している。「発生史論」では、「初期資本主義」という概念を用いて、資本主義成立における前期的資本と産業資本との経過的結合結びつきを認めていたが、これらの著作では、**前期的資本の推進的役割を否定している**

ここで、大塚の小生産者の発展説は、**基本的に確立し、さらに発展して行った**

法政大学で大塚は、抜群の学生、戸谷敏之（とやとしゆき）に出会う

戸谷は一高を卒業し、東大経済学部合格していたが、思想問題への関与を疑われ、合格を取り消されたため、法政へ入学した

戸谷は、日本農業史の小野武夫の演習に属していたが、大塚の指導のもと「イギリス・ヨウマンの研究」と題する論文を完成させた

これは、法政大学・学友会の機関紙「経苑」に掲載された

戸谷は、大塚と5歳しか違わず、対等に議論し合う程の関係であり、研究者として大いに囑望されたが、徴兵され、フィリピンで戦死した

東大への復帰と戦時下での研究

1937年12月に矢内原忠雄が東大を辞職し、38年2月の第二次人民戦線事件では、大内兵衛、有沢広実が、39年1月の平賀庸学では、河合栄治郎と土方成美がそれぞれ休職処分となり、東大経済学部の教員組織は、壊滅的になった

その平賀庸学に抗議して辞職した本位田の後任人事により、大塚は1939年4月に経済学部講師として東大に迎えられた

東大の再建として永田清（財政学）や北岡寿逸（社会政策）を招くなど時局迎合的人事が行う中で、大塚だけは心ある学生に歓迎された

その初講義は学生で溢っていたという

「欧州経済史序説」を補訂した「近代欧州経済史序説」（1944）は、大塚の代表作である（上巻には当初、イギリスにおける産業革命への道と「産業資本展開の歴史的條件」の二章を収める予定であり、続いて下巻では「前期的資本の問題」と「資本主義の「精神」の問題」も企画されていたが、健康上の理由で果たされなかった）

世界に先駆けて、**なぜイギリスで産業革命が起きたのか**

その原因を解き明かすため、同書では西洋の世界史的膨張から出発して、大航海時代の覇権国スペイン、オランダの興亡をへて、ヨーロッパ大陸の辺境イギリスへの考察の舞台が移る

ここまでは経済的繁栄の北漸がマクロ的に描かれるが、イギリスでは一転して、国民的生産力の源泉を探るため農村毛織物工業の展開というミクロの世界に分け入り、さきの問の解明を試みた

ここには世界史的膨張する西欧ではなく、その背景にある国民的生産力に注目することで、近代化の原点としての西欧が追求されている

戦時下の病床で書き上げたこの著作は、伝統日本の称揚や近代の超克が声だかに叫ばれた時代、近代化とその批判的継承の意義を、「敵国」英国の歴史に見出したものであり、時局への抵抗と敗戦後の日本の課題さえもが示唆されている

海外との学問的交流が遮断されていた困難な時代にあって、大塚は輸入学問の単なる紹介ではなく、前期的資本や中産的生産者層など自前の概念を作り上げ駆使し、日本人の目をも

って「西欧近代」捉え、独自の歴史像を構築したのであった
戦争末期になると、大塚一家は神奈川県与瀬に疎開する
与瀬には、川島武宣や地理学者の飯塚浩二らも疎開してきた
大塚は彼らと交流を深め、ウェーバーの「経済と社会」を深く読み込むことができた

大塚経済史学の戦後

38歳にて敗戦を迎えた大塚は、「世界」や「中央公論」などの一般雑誌や新聞などに寄稿し、日本の平和的再建と民主化、そのための人間変革の必要性を論じるとともに川島武宣、内田義彦らによって設立された青年文化会議に丸山眞男と参加している

この時期 繰り返し手術を受ける病苦の中で、大塚の著作論文集としてまとめられた「近代資本主義の系譜」(1947年)には前記的資本や、資本主義の小生産者的発展説に関する論文が収録され、戦時期の生産力論や経済倫理論、敗戦直後の人間類型論は「近代化の人的基礎」(1948年)「宗教改革と近代社会」(1948年)などに結実した

同年には、「近代化の歴史的起点」、翌年にはこれを改変し「近代主義の起点」として刊行している。

これらの著作には、戦後改革をへても、日本における近代化や人間変革が不徹底であるとの批判が込められている

1950年代以降、健康が回復しだした大塚は、局地的市場圏論や共同体論など、資本主義発生史研究に新たな展開を見せる

局地的市場圏論は、資本主義の起点を遠隔地貿易でなく、農民や手工業者による局地内の分業関係に求めたのであり、日本経済史家にも影響を与えた

「共同体の基礎理論」(岩波書店 1955年)はマルクスの唯物史観を基礎に、ウェーバーにも依拠し、古代オリエントから古代ギリシャ、中世ヨーロッパに至る農村共同体の特徴と、その解体を理論的に検討している

大塚が共同体に着目したのは、資本主義の発生とは多面から見ると封建制の崩壊であり、その中に共同体の解体という局面が含まれているからであった。

だが、共同体論の意義はそれだけに止まらず、日本社会になお残る前近代の特徴を批判するためでもあった

高橋幸八郎、松田智雄、さらにアメリカ経済史の鈴木圭介らと交えて、比較経済研究を主導したのもこの頃である

大塚・高橋・松田編「西洋経済史講座」全五巻(岩波書店 1960~62年)は、多くの研究者や門弟を結集した記念碑的成果である

しかし、この講座の主要テーマである封建制から資本主義への移行に対しては、もはや現代日本の実践的課題ではない、という批判が大塚門下の吉岡昭彦らから提起され、これ以降、学会では大塚離れが始まっていく

これに対して大塚は、大規模経営化と官僚化が進行する高度成長下において、小ブルジョワ層に着目することの意義を強調する

さらにフリードリッヒ・リストの影響により産業構造論的視角から「国民経済、その歴史的考察」(1965年)を著し、中継貿易国家オランダと対比した内部成長型イギリスの経済構造の意義や、重商主義と議会制民主主義との関連を論じるなど、**比較史的視点を深めて**いった

1964年12月には、マックス・ウェーバー生誕100年記念シンポジウムを東大で企画し、それをもとに大塚久雄編「マックス・ウェーバー研究」(東大出版会1965)を刊行している
1968年2月に行われた東大での最終講義のテーマは「イギリス経済史における15世紀」(著作集第九巻収録であった)

ここでは、**前期的資本の構想に始まる自身の研究を総括**している

晩年の大塚久雄

30年近い東京大学の研究教育活動を終えたのち、大塚はICUで教壇に立った

この頃からウェーバーの宗教社会学をベースとして、大塚は低開発国の経済的自立化を考えるとともに、**人間疎外の問題や比較文化論へと考察の射程を一層広げて**いく

1979年には「生活の貧しさと心貧しさ」(みすず書房)「意味喪失の時代に生きる」を刊行した

経済史家としての現代的問題への関心は、「歴史と現代」(朝日新聞社1979年)において平明に語られている

そこには、当時の日本経済がオランダ型貿易国家に接近しているという危惧が表明されている

それは現実となり、1980年代半ば以降、日本経済はバブルの熱狂とその崩壊を経験し、その後、長い低迷に陥った

1985年2月におけるICUでの最終講義のテーマは「オランダ共和国の経済的衰退とその諸原因、一つの比較史的研究」(著作集第11巻収録)であった

オランダから発想を得た比較経済史研究に相応しい内容であり、先述の東大での最終講義と合わせて読むべきであろう

ICUでは講義の傍ら、学内のチャペルで宗教講演も行っている

世俗化と管理社会化・人間疎外がひたすら進む現代社会にあって、そのメッセージは生きる意味を求める学生に深い感銘を与えた

最晩年にはウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を単独で改訳し(岩波書店1988年)、さらに1994年には「社会科学と信仰と」(みすず書房)が刊行された

大塚はこの多大な業績により、1975年に文化功労賞に選出され、92年には文化勲章を授与された

1996年7月9日89歳で死去

主要各紙は、一斉にその死を伝えた

その告別式では丸山眞男の弔辞が代読された

それから一か月後、その丸山も大塚の後を追うように逝き、戦後日本の代表的な知性が相次いで亡くなった

二、本書の構成と解説

「近代化と民富」

この文庫には表題の「資本主義と市民社会」のほか、それに関連する14の論考を集めることにより、大塚の資本主義発生し研究の変遷をテーマ別かつ時代順に辿れるようにした

これらの著作によって、生産力論を基礎にし、エートス論、民富論、人間類型論、国民経済論へとテーマを拡大し低開発国の近代化論へ至る長い射程と広がりを持った大塚の研究を展望することができるであろう

なお、共同体論も大塚の経済史研究の重要なテーマであり、資本主義や市民社会の成立と裏腹の関係に立つものだが、それについては文庫別途刊行される(大塚久雄著 小野塚知二編「共同体の基礎理論 他6編」(2021年))

大塚の経済史研究の仕様概念に「近代化」がある

ここに収録した論考はいずれも何らかの形でそれと関わる

大塚の近代化論は、単なる経済成長や工業化、都市化などのことではない

むしろ、そうした量的指標では認識できない社会構造の転換や、人間の意識の変革を伴う質的な内容を意味する

大塚による「近代化」とは、国家が主導する上からの工業化や経済成長路線によってではなく、市民によって自発的に下から達成される企業ものであり、市民生活の物質的・精神的向上を基盤にするものとして構想されている

したがって、大塚の近代化論は市民社会論としての意義がある

日本では明治以降、国家主導の産業化には成功しても、こうした意味での近代化の達成は不十分であった

大塚には、もう一つ重要な概念がある

コモンウィール ないしコモンウェルスである

これは、元来中世末から近世初期にかけてイングランドで使用された古語である

大塚はこの語句を資本主義発生期における「民富」、すなわち封建制の解体の中から登場した市民の物質的・精神的繁栄を意味するものとして主に使用していることから、その近代化概念や小生産者的発展説を読み解くカギとなるものである

だが、そのみならず、この語は現代社会の諸問題を考える上でも重要である

以下では本書に収録した論考の初出典を示すとともに各部のテーマと各論考について簡

単に解説する

第一部生産力と経済倫理

- ① 経済倫理の実践的構造ボックスの問題提起に関して
- ② 経済倫理と生産力
- ③ 資本主義と市民社会 その社会的系譜と精神史的性格

第二部市民社会と民放

- ④ 経済的繁栄の現像 登記による 自制的富の結末
- ⑤ 経済再建期における経済史の問題
- ⑥ 近代化の歴史的起点、いわゆる民富の形成について

第三部近代化と人間類型

- ⑦ 自由主義に先立つもの
- ⑧ 魔術からの解放解除
- ⑨ 現代日本社会における人間的状況一つの感想風な回顧と展望

第四部資本主義と民主主義

- ⑩ 巨万の富歴史における符号と民主
- ⑪ 民主主義と経済構造
- ⑫ 政治的独立と国民経済の形成

第五部 低開発国の近代化と自立か

- ⑬ 低開発国研究にとって経済史学が持つ意義
- ⑭ 近代化の経済史的条件低開発国問題に関して西洋経済史は何を物語るか
- ⑮ 経済の近代化過程における宗教の役割

終わりに

かつては、大塚久雄と丸山真男、川島武宣、内田義彦らの読者層はかなり重なり合い、そこに「共通の知的共鳴版」があった

岩波新書として刊行されたそれぞれの著書は、社会科学に関する啓蒙的著作であり、かつ市民社会論として多くの読者を持った

この四人の中での結節点にあり、他の三者に与えた影響も大きかった

この文庫は専門的研究者だけでなく一般の読者層にも向けて、かつて市民の間に広く深く根をはっていた共通（地下茎）の一端を掘り起こす機会としたい

しかし、この文庫の主眼は戦後日本の社会科学の遺産を再確認することだけにあるのではない

本書には、現代的視点に立った意義もあると考えている

大塚の学問は、単なる資本主義の発生や展開に関する各分析ではなく、わたしたちが生きているこの社会の由来についての探求と未来への洞察点、すなわち、どこから来てどこへ行くのかという 預言者的精神のもと、巨視的歴史観が反映していた

その学問は、初期資本主義研究を超えて、転換期の現代社会の諸問題を考える視座を提供し、新たな社会の構築の論理と倫理を示すものであった

そのような関心のもと刊行されたのは先述した梅津順一、小野塚知二編「大塚久雄から資本主義と共同体を考える——コモンウィール・結社・ネーション」であった

同書は、問題にある三つのキーワードを中心に大塚の資本主義発達史研究を振り返り、「伝統的な共同体」に代わる「新しい共同体」（市民共同体）の可能性を展望したものである
新しい共同体の形成とは、グローバリズムと格差の拡大で、破壊された人間社会の回復を目指すことにもつながる

その基礎になる概念が大塚が着目したコンフィールである

同書の刊行に合わせて、編者のひとり、梅津順一「大塚久雄の座標軸」という一文を寄せている（2018年）

この中で梅津は、大塚の経済史研究は「戦後の日本に世界を見る座標軸を与えるものでした」指摘している

この座標軸によって、日本の特質を世界史の中で位置づける方法が確立したのである

この（座標軸）という言葉を使用した論考が（世界1981年1月）に掲載されていた
隅谷三喜男「内村鑑三と現代--座標軸を持つ思想」がそれである

隅谷は、内村の思想の根底にある座標軸に注目する

日本の思想が 横軸しか持たず 時代の流れに押され、横へ横へとスライドする中で、内村は横軸だけでなく、縦軸を持つことで、定点を確立できた稀有な思想家であった

隅谷は、「座標軸の構築こそ、内村が遺した遺産であり、その再構築が今問われている」と結んでいる

大塚久雄は内村の遺産を継承した思想家であった

「社会科学と信仰」「ウェーバーとマルクス」などは、大塚による座標軸の例である

この二つの J（ジーザスとジャパン）を愛した内村が日本の思想界において稀有な存在だったように、大塚も「ウェーバーとマルクス」のように、両立が容易でない座標軸を設定したことで、同時代の社会学者の中で、より大きな射程にたち、独創的な体系を構築できたのである。

混迷が深まる現在、「座標軸の再構築」が求められている

大塚久雄読み返す意義は、この点にあるのではないか

以上